

非行少年と向き合っ て ～心理学の学びを活かした仕事～



Uchiyama Reiko
内山 麗子

家庭裁判所調査官

群馬県出身

2003年3月 お茶の水女子大学 生活科学部 人間生活学科
発達臨床心理学講座卒業

・東京、新潟、小田原の家庭裁判所を経て、現在、横浜家庭裁判所に勤務

家庭裁判所調査官という仕事

家庭裁判所は、夫婦や親族間の争いなど家庭に関する問題を調停や審判などで解決するほか、非行をした少年についての処分を決定する少年審判を行なっています。私たち家庭裁判所調査官はその中で心理学、社会学、社会福祉学、教育学といった行動科学の専門的な知識や技法を活用して、家庭内の紛争の解決や非行少年の立ち直りに向けた調査活動を行なっています。

家庭裁判所調査官の担当には家事係と少年係があり、現在は少年係として働いています。非行をして警察から家庭裁判所におくられてきた少年に実際に会い、なぜ非行をしてしまったのか原因を分析するため、今までの生い立ちや家族関係、友人関係、学校生活など、その少年を取り巻くあらゆる話を聞きます。少年の保護者にも会うほか、場合によっては教師、職場の雇用主などにも話を聞いたりして、最終的にその少年が立ち直るためにはどういう手当てが必要かを考え、裁判官に対して処分に関する意見を書面にまとめて提出します。

家庭裁判所調査官は全国に1500名ほどいますが、裁判所職員の中では少数派です。全国各地の家庭裁判所に配属されるので、転勤の多い仕事といえます。私も東京の後に新潟へ勤務し、その後小田原、横浜と3度の異動を経験しました。しかし異動の希望を出すこともでき、産休・育休や育児に関する制度も整っています。私もこれまで2度の育休を取得しました。育児をしながら活躍している先輩が多くいますし、女性も働きやすい職場だと感じています。

この職業を目指したきっかけ、 在学中の学び

最初は、漫画やテレビドラマで家庭裁判所調査官という職業を知り、大学で学んでいた心理学を活かせる仕事として興味をもちました。その後、小学校の教職課程の実習で児童自立支援施設に行き、そこで非行少年といわ

れる子どもや彼らの置かれている状況に触れて、少年たちの立ち直りに関わりたいという思いを強く抱くようになりました。大学4年生の時には、犯罪・非行臨床心理学が専門の藤田宗和先生のゼミに所属し、先生から非行少年に関わる現場の話をつかがい、心理学の学びを深めていきました。

大学では心理学を専攻しましたが、家庭裁判所調査官として働くためには、法律の知識も不可欠です。法律の専門的な知識は、採用試験に合格した後、裁判所職員総合研修所での2年間の研修やその後の実務を通して身につけていきました。法律を初めて学ぶ戸惑いもありましたが、大学で学んだ心理学の知識や在学中の経験が自信になり、家庭裁判所調査官としての専門性の獲得につながっていったと思います。

仕事のやりがい、転勤先での出会い

さまざまな境遇の非行少年がいる中で、非行の原因や再非行の防止を考え、試行錯誤する毎日です。中には、なかなか話をしてくれない子、自らの経験や感情をうまく言葉にできない子もいて苦労します。少年たちは、表す態度はさまざまですが、みんな自分がこれからどうなってしまおうだろうという不安を抱えているので、なるべく丁寧に話を聞くことを心がけ、信頼関係を築けるよう努めています。話をきいてもらえる体験に少年たちが喜びを感じてくれた時や、私と話のやりとりをする中で、少年が自分の抱えている問題に気づき、それを解決しようと前向きな気持ちになってもらった時などに、この仕事をしていてよかったなとやりがいを感じます。

また、転勤が多い職業柄、いろいろな地域に赴任するのですが、その土地での新たな出会いや発見が楽しみだったりします。新潟に転勤が決まった時には、天候や生活習慣など不安もありましたが、仕事や生活を通じて、地域独特の家族観や少年たちの行動、その土地の文化を知ることができました。雪国の寒さを乗り切るために厚手のダウンコートやス

ノーブーツを購入したり、移動のために車を運転したり、土地に合わせた生活をしました。職場の同僚と市内の祭りに参加したり、スキーや佐渡島へ旅行に行ったりしたことは良い思い出です。転勤は生活の変化や新たな出会いを提供してくれるので、それを楽しむようになっています。それから仕事をしていると、お茶大出身の先輩や後輩の家庭裁判所調査官と出会うこともあって、うれしくなります。皆さん生き活きとお仕事をされています。

仕事をしていると次々と課題が出てきて、いつまでも学びは尽きません。専門知識や面接技法などについて職場で研鑽の機会が多くあるほか、心理テストは大学で学んだことを続け、仕事で用いながら知識を深めています。また、様々な人と会って話をする仕事なので、大学の講義や実習で得た知識だけでなく、在学中のアルバイトの経験やサークル活動、読んだ本、見た映画、旅行に行つてひろげた知見などあらゆる事柄が今の仕事に役立っていると感じます。お茶大生のみなさんにも、学生のうちにしかできないことをいろいろ体験し、卒業してからもその時々状況に合わせて学び続ける姿勢をもち、社会で活躍してほしいと思っています。

文責：基幹研究院人文科学系准教授
難波 知子

わたしのオフタイム

体を動かすことが好きで、大学時代はテニスのサークルに入っていました。就職後も同僚とテニスをしたり、フルマラソンにも挑戦したりしました。出産後は、子どもと遊んで体を動かしたり、朝ヨガをしたりしています。スポーツや運動を通してのコミュニケーションが、良好な人間関係や心身の健康保持につながっています。